様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７１０２９４

研究課題名（和文）ポルトガル語史料を用いたアフリカにおけるキャッサバの普及に関する歴史学研究

研究課題名（英文）Study on the History of Diffusion of Cassava in Africa based on Portuguese Documents

研究代表者
石川　博樹（Ishikawa, Hiroki）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号：４０５５２３７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,400,000円、（間接経費）　1,020,000円

研究成果の概要（和文）：南米大陸原産の農作物キャッサバは、アフリカ大陸の広大な領域で栽培され、多数の人口を養う重要な主食用農作物となっている。アフリカ大陸中央部におけるキャッサバの普及過程については未解明の点が多いが、その一因は関連ポルトガル語史料が十分に活用されていないことにあった。本研究においては、ポルトガルの海外領土歴史文書館等において調査を実施し、ポルトガル植民地支配末期にアンゴラで刊行された農業統計である『アンゴラ農業センサス』全35巻のうち32巻の現物あるいは複写を入手した。そしてそれらの内容を分析し、アンゴラにおけるキャッサバの栽培・普及状況について検討を行った。

研究成果の概要（英文）：Cassava, a woody shrub native to South America, is extensively cultivated in tropical Africa and it is an important staple food in this region. Although the diffusion of Cassava in Africa has been an object of study for a long time, the history of this crop in the Portuguese Africa is still in completely understood. In this study, I researched Portuguese documents on Cassava in Angola in the Overseas Historical Archive, Lisbon, Portugal and other archives and examined cultivation of Cassava in Angola, based on the information in the Agricultural Census of Angola, which was published in the last period of the Portuguese colonial rule of Angola.

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：アフリカ　歴史　農作物　ポルトガル　アンゴラ

１．研究開始当初の背景

マニオクとも呼ばれる南米大陸原産の農作物キャッサバは、アフリカ大陸、南米大陸、東南アジアの赤道に近い広い範囲で栽培されている。世界総生産量の 50%以上が生産されているアフリカ大陸において、キャッサバは多数の人口を養う重要な主食用農作物の 1 つとなっている。

このような重要性のゆえに、アフリカ大陸各地のキャッサバを対象とした農学的研究の蓄積は厚く、またこの作物の普及に関する歴史学的研究もなされてきた。

現在のところ、まずポルトガル人がコンゴ川下流域にあり、現在のアンゴラの北部を主たる版図にしていたコンゴ王国にキャッサバを伝え、その後この王国の周辺地域にその栽培が広まったこと、これとは別に西アフリカ諸国と東アフリカの沿岸部において 19 世紀以降キャッサバの栽培が広まったことなどが明らかにされている。

西アフリカ、東アフリカのキャッサバについては、イギリスおよびフランスによる植民地支配期に農業調査の一環としてキャッサバの栽培や利用方法に関する研究が行われ、その普及過程に関する歴史学的研究も進んでいる。

それに対して中央アフリカのコンゴ、およびそれに隣接するアンゴラにおけるキャッサバの普及については、未解明の問題が少なくない。その要因はポルトガル語史料に基づいた研究の乏しさであった。

コンゴは 19 世紀末にベルギー領となるまでポルトガルが沿岸部を支配しており、アンゴラは 1970 年代半ばまでポルトガルの植民地であったため、両地域ともに 15 世紀からポルトガル語による史料が連綿と残されている。

しかしながらこれまでのキャッサバ研究は専ら英語圏およびフランス語圏の研究者によって進められており、このような両地域に関するポルトガル語史料の利用は十分ではなく、また参照される場合にも翻訳版が用いられることが多かった。

２．研究の目的

本研究の目的は、ポルトガル語史料の中に含まれるキャッサバに関する情報を収集し、それらに基づいてコンゴおよびアンゴラにおけるキャッサバの普及過程について、キャッサバがコンゴに持ち込まれたと考えられている 16 世紀から、アンゴラにおいてポルトガルの植民地支配が終焉を迎えた 1974 年代半ばまでを対象として、より具体的に解明することである。

このようなキャッサバという農作物に関する歴史学的な研究は、キャッサバの栽培方法などを研究対象とする農学研究者、キャッサバと人々の関係を探る人類学研究者、あるいはキャッサバの経済的重要性に着目する経済学研究者といった他分野の研究者との対話を可能にするものである。これらの研究者との将来の学際的共同研究の基盤を形成することも、本研究の重要な目的の 1 つである。

それと同時に、文字史料に基づきつつ、学際的な共同研究を行い得るアフリカ史研究である本研究を実施することにより、我が国におけるアフリカ史研究の進展を図るということも本研究の重要な目的である。

３．研究の方法

本研究においては、ポルトガル国立図書館（Biblioteca Nacional de Portugal）、そして熱帯科学研究所（Instituto de Invenstigação Científica Tropical）傘下の海外領土歴史文書館（Arquivo Histórico Ultramarino）および資料情報センター（Centro de Documentação e Informação）において文献調査を実施した。

前者ではアンゴラにおけるキャッサバ栽培に関する史料・参照文献を収集し、後者ではポルトガルによる植民地支配末期の 1960 年代半ばから 1970 年代初頭にかけてアンゴラ農業調査団（Missão de Inquéritos Agrícolas de Angola）の調査に基づいてアンゴラにおいて発行された農業センサスである『アンゴラ農業センサス（Recenseamento Agrícola de Angola）』の調査を行い、その収集に努めた。

そしてキャッサバに関する情報が豊富に含まれている『アンゴラ農業センサス』の内容分析を中心として研究を進めることにより、アンゴラにおけるキャッサバの栽培状況・普及過程の解明を進めるという研究手法を採用した。

４．研究成果

本研究では、アフリカ大陸において初めてキャッサバが持ち込まれ、またこの農作物の大陸内における普及において重要な役割を果たしたアンゴラにおけるキャッサバ栽培の普及に関する研究を行った。

本研究においては、アンゴラのキャッサバ栽培に関して豊富な情報を内包する『アンゴラ農業センサス』の収集、および本センサスから得られる情報の分析に努めた。

現在アンゴラは 18 の州で構成されているが、『アンゴラ農業センサス』では、アンゴラ全土を 36 に分けた「農業区 zona agrícola」という単位、およびその下位区分として「地区 região」という単位が用いられている。そして本センサスでは、各「農業区」の「伝統的農業 Agricultura Tradicinoal」および「企業的農業 Agricultura Empresarial」の調査結果に関する巻の刊行が企図されていた。

ポルトガルの海外領土歴史文書館および資料情報センターにおける調査の結果、『アンゴラ農業センサス』全 35 巻のうち 32 巻の現物あるいは複写を入手することに成功した。しかし第 3 巻、第 27 巻、第 33 巻につい

ては現物を確認できておらず、これらの巻が刊行されたのか、あるいは未完に終わったのかという点については調査中である。

現在現物を確認することができる『アンゴラ農業センサス』32 巻について内容の分析を行った結果、全 36 の農業区のなかで、「伝統的農業」に関する巻が刊行されているのは 22 区、「企業的農業」に関する巻が刊行されているのは 20 区であること、アンゴラの東部および北西部の農業区を扱った巻がほとんど刊行されていないことなどが明らかになった。

『アンゴラ農業センサス』に関する調査と同時にポルトガル国立図書館をはじめとするポルトガルの諸機関、および国立民族学博物館をはじめとする国内の諸機関においても文献調査を実施し、『アンゴラ農業センサス』と同様にポルトガル植民地支配末期にアンゴラで刊行された全国版の農業統計である『アンゴラ農業統計 Estatísticas Agrícolas Correntes de Angola』、アンゴラ各地の環境を解説した『アンゴラの環境的特性 Características Mesológicas de Angola』などを入手した。そして収集した文献から得られる情報を踏まえつつ、『アンゴラ農業センサス』に含まれるキャッサバ関連情報を分析し、アンゴラにおけるキャッサバの栽培状況・普及過程の解明を進めた。

そして以下の 3 つの学術発表を行い、本研究で得られた研究成果の一部を報告した。

まず日本ポルトガル・ブラジル学会 2012 年度大会(2012 年 10 月 20 日, 於天理大学〈奈良県〉)においては、「ポルトガル植民地期農業統計資料に見えるアンゴラの南米原産作物栽培」と題して、キャッサバをはじめとする南米原産作物のアンゴラにおける栽培について、『アンゴラ農業センサス』からいかなる情報が得られるのかという点を報告した（学会発表①)。

日本アフリカ学会第 50 回学術大会（2013 年 5 月 25 日, 於東京大学〈東京都〉）においては、若手研究者によるアフリカ研究の手法に関する特別セッション「アフリカ研究の手法」に講演者として招かれ、「東洋史、エチオピア史、アフリカ史」と題して報告した。

本発表では、本科学研究費研究課題の研究成果について言及しながら、植民地期の農業センサス、あるいはポルトガル語史料を用いたアフリカ史研究の可能性について解説を行った（報告②)。

日本アフリカ学会第 51 回学術大会（2014 年 5 月 24 日, 於京都大学〈京都府〉）においては、「ポルトガル植民地期アンゴラの農業統計資料」と題して発表を行った。本発表においては、まず『アンゴラ農業センサス』の刊行状況、所蔵機関、構成・調査項目などについてその概要を述べた。

そして本センサスにおいてアンゴラ東部の大半の地域、および北西部に関する巻が刊行されていない背景として、1961 年より開始されたアンゴラの独立闘争の推移が影響していた可能性が高いこと、アンゴラの自然環境の多様性を反映して、「伝統農業」の「調査結果 Resultado」の「栽培 Cultura」というセクションで取り上げられている農作物の種類が巻によってかなりばらつきがあること、このセクションの前半が個別の農作物の栽培状況に関する調査結果、後半が混作に関する調査結果であり、これらの調査結果からポルトガル植民地支配末期のアンゴラ農業について豊富な情報が得られることを解説した。

それとともに『アンゴラ農業センサス』がアンゴラの北西部、および東部の大半の地域をカバーしておらず、そのために研究が比較的進んでいる旧イギリス植民地のザンビア、旧ベルギー植民地のコンゴ民主共和国との比較検討に支障があること、植民地支配末期に本センサスが刊行された背景について、ポルトガルの植民地政策および農業政策にも目配りしつつ解明していく必要性があること、また本センサスに記載されている農業関連情報を正確に理解するためには、ポルトガル語の農業用語、行政用語の知識が欠かせないことなどを指摘した。

そしてこれらの課題への対処が必要ではあるものの、『アンゴラ農業センサス』からはポルトガル植民地支配末期のアンゴラ農業について多くの情報を得ることができること、本農業センサスを用いた研究は農業研究にとどまらず、大西洋奴隷貿易および植民地支配というアフリカが体験した重大な歴史的事象に関わるものであり、また人口増加その他アフリカ大陸内部における歴史的な諸変化にも関わるものであるため、アフリカ史研究の立場から研究を続ける必要があることを述べた（発表①)。

現在、これらの学術発表の内容を基にした論考を執筆中であり、日本アフリカ学会をはじめとする本研究に関わる学会の学術雑誌に投稿する準備を進めている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計３件）

①石川博樹「ポルトガル植民地期アンゴラの農業統計資料」日本アフリカ学会第 51 回学術大会 (2014 年 5 月 24 日, 於京都大学〈京都府〉)

②石川博樹「東洋史、エチオピア史、アフリカ史」日本アフリカ学会第 50 回学術大会（2013 年 5 月 25 日, 於東京大学〈東京都〉）

③石川博樹「ポルトガル植民地期農業統計資料に見えるアンゴラの南米原産作物栽培」日本ポルトガル・ブラジル学会 2012 年度大会(2012 年 10 月 20 日, 於天理大学〈奈良県〉)

６．研究組織

(1)研究代表者

石川　博樹（ISHIKAWA, Hiroki）
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授
研究者番号：４０５５２３７８